



亜鐘 芽生

振り返り、一人分の足跡がついた雪道を見た。

毎年、二人分の足跡があったはずの道。

——そう、おととしまでは。

今年は僕の一人分の足跡。

去年は——...一面に飛び散った君の血。真っ赤な雪。真っ赤なトラック。

君は去年。この場所で交通事故にあった。

僕の一人分の足跡がどんどん長くなっていく。

毎週土曜日。あの事故以来、まだ目の覚めない君のお見舞いに行く日。

君の眠っている病室につくと、君のお母さんが泣いていた。空気がいつもと違っていた。

「どうしたんですか!？」

まさか、と思いながらも僕が聞くと、君のお母さんは黙って首を横に振り、カーテンが閉まったままの君の寝ているベッドを指さした。僕はおそるおそるカーテンを開けると、

その

まさか

だった。

今はまだ眠ったままでも、いつかは目が覚めると信じていた。君は絶対に目を覚まし、また僕の隣で笑ってくれると疑わなかった。

だけど。

君はもう目を覚まさない。

僕はゆっくりと病室の窓を開け、

君と同じ世界へ——...